

## 全体講評 児童生徒作品部門

授業で学んだことを取り入れたり、調べたことや自分たちの思いを伝えたりと学習の成果としてすばらしい作品が見られ、全体としてよくできているという印象である。探究的な学びのなかでの作品も多く、指導者が新しい学習指導要領を意識していることがうかがえた。

学校の中でIT活用が盛んになったこともあるためか、映像やデジタルコンテンツの作品が多かった。学校にある機器やソフトの活用は、児童生徒にとって身近で手軽に使えるメリットがある。一方で、紙しばいには、あたたかさや手作りの良さが感じられた。

残念ながら、制作意図が教材としての視点からずれている作品もあった。制作の意図を明確にして、どんな手法で作品を制作するとより効果的であるかを考える必要がある。また、制作の意図が明確に示されていても、地域性や教材性の面で評価に差がついた作品もあった。加えて、伝えたいことを適切に伝えるため、作品の時間設定についても検討してほしい。

児童生徒作品とは言うものの、指導者の手が入れば質的な高まりが見られるのは当然であり、その見極めが難しく、純粹に児童生徒のみの作品が集められないものかと強く感じた。また、小学生から高校生の作品まで1つの括りで評価することの難しさ、さらに、今後デジタル技術がさらに向上することが予想される中で映像作品やデジタルコンテンツと、紙しばいを同じ土俵で評価していくことの難しさを見ると、主催者には、審査の方向性について検討していただきたい。

児童生徒が地域に目を向けることは大切なことである。教材づくりを通して子どもたちに気づきがあるのであれば、この部門を設定している意義はあると考える。